



# 序論

---

1 総合計画策定及び見直しの趣旨	2
2 総合計画の構成・計画期間	3
3 清須市の位置、地勢、面積、歴史・沿革	4

---

# 1 総合計画策定及び見直しの趣旨

いま、清須市をはじめとする地方自治体をめぐる環境は、激変の最中にあります。社会動向をみると、高齢化の進行、出生率の低下などによりこれまでわが国が経験したことのない人口減少社会が到来しています。また、経済のグローバル化に伴い産業構造は大きく変化し、企業立地も大きく変化しつつあります。そしてこれらの変化のスピードはますます速くなり、これに対応していくことは容易なことではありません。

わが国の地方自治体を支える制度的枠組みも大きく変化しつつあります。市町村の自主的な合併を目的とした合併特例法の改正を含む平成12年4月の地方分権一括法の施行から、基礎自治体である市町村の体制を強化し、これまで以上に地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うことができるようにすることが求められています。

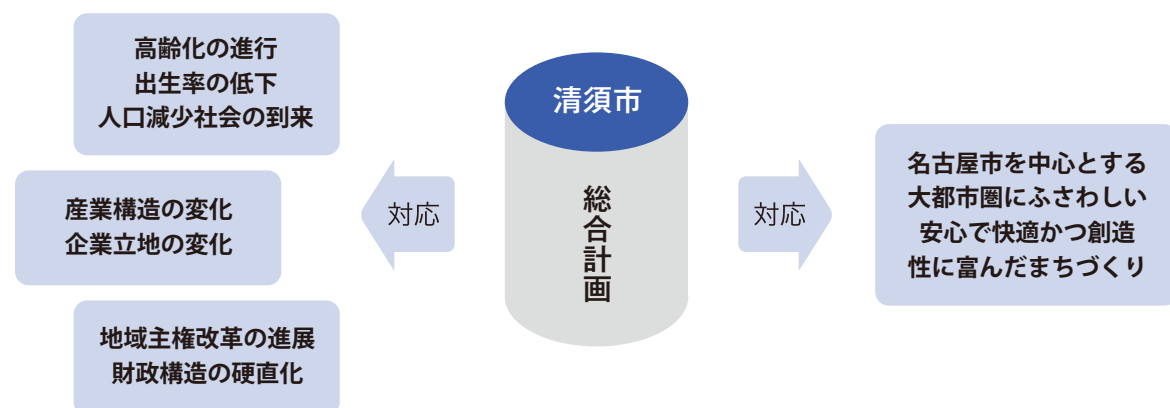
こうした大変動の中、平成17年7月に西枇杷島町、清洲町及び新川町が合併して清須市が誕生し、平成21年10月の春日町との合併を経て現在の清須市となりました。

さらに、地域のことは地域に住む住民が責任を持って決めることのできる活気に満ちた地域社会づくりを目指した平成23年5月の「地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律」の施行により、清須市は自らの判断と責任により、地域の実情に沿った行政を展開していくとともに、名古屋市を中心とする大都市圏にふさわしい、安心して快適かつ創造性に富んだまちをつくることを目指します。

この清須市が大きな変化と改革の流れの中で、市民の暮らしを支え、まちの活力を維持していくためには、旧4町の施策を継承するのみならず、合併時の「新市建設計画」、「新市基本計画」を尊重しながら、行政体制の変革と行政施策・事業のより一層の重点化を図り、真に必要な施策に行政資源を投入するといった大胆な改革が欠かせない状況となっています。

こうした点を踏まえ、清須市における平成19年度から10年間の行政運営の基本的な指針として「清須市総合計画」を定め、厳しい状況に対応した行政施策のあり方を明らかにするとともに、この計画のもと、着実な行政運営を行ってきました。また、本計画策定時に計画期間の中間年度にあたる平成23年度中に見直しを行うこととしており、前期基本計画を検証するとともに、前述の春日町との合併、地方自治制度の変革を反映した基本構想の見直し、後期基本計画を策定することに主眼を置き、改訂しました。

## ■ 総合計画に求められる視点



# 2 総合計画の構成・計画期間

本計画は基本構想・基本計画によって構成します。総合計画の計画期間は平成19年度から平成28年度までの10年間とします。

## 1 基本構想

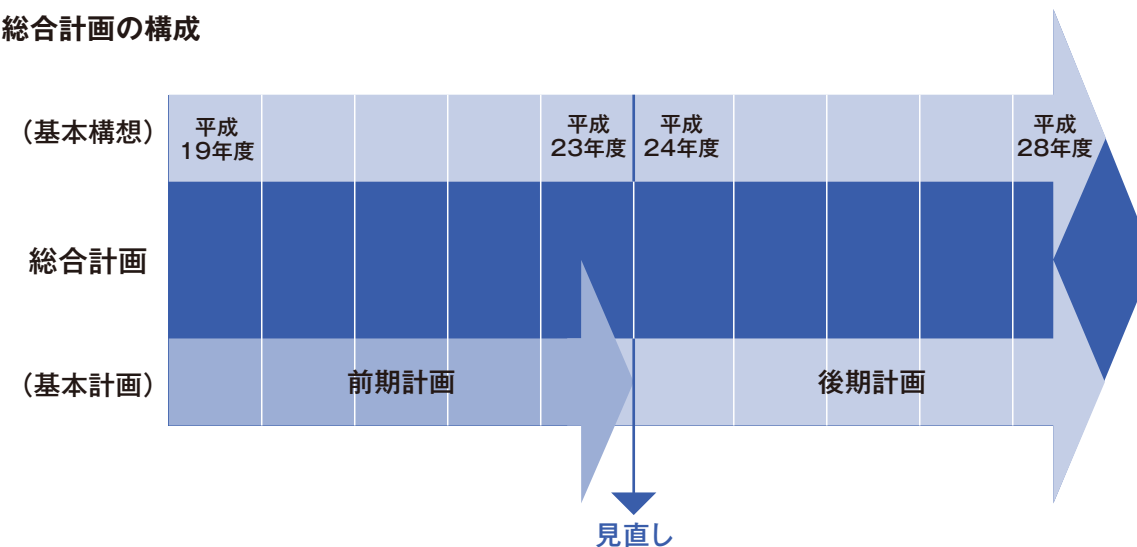
基本構想は、今後の清須市の方向性を示すもので、市の「基本理念」と「将来像」を定め、これを反映させるための今後の「行政運営の方針」と「施策の展開方向」を記述しています。その上で「施策の指針」を定め、分野別の施策の方向を明らかにしています。

## 2 基本計画

基本計画は、基本構想に示された「行政運営の方針」、「施策の展開方向」及び「施策の指針」を踏まえ、市の「現状と将来見通し」を示した上で、「土地利用方針」と今後実施していく「施策の概要」について記述しています。「施策の概要」では、基本構想に示された「施策の指針」にしたがって、個別の施策・事業の内容を体系的に示しています。

基本計画の計画期間は平成19年度から平成28年度までの10年間としますが、前半5年を前期、後半5年を後期と位置づけ、社会情勢の変化に対応するため、前期の最終年度である平成23年度に計画を見直しました。

## ■ 総合計画の構成



# 3 清須市の位置、地勢、面積、歴史・沿革

## 1 位置・地勢・面積

清須市の区域は、愛知県西部、尾張平野のほぼ中央に位置し、南部は名古屋市に、北部は一宮市及び稲沢市に、東部は名古屋市に、西部はあま市に隣接しています。

地形は比較的平坦で、庄内川の下流域にあり、ほとんどの地域が海拔10m未満となっています。また、庄内川のほかに新川、五条川などの河川が流れ、豊かな水辺環境に恵まれ、四季折々の風景を楽しむことができます。

交通は広域の利便性に恵まれ、JR東海道本線、名鉄名古屋本線・犬山線・津島線及び東海交通事業城北線の鉄道網のほか、名古屋第二環状自動車道、名古屋高速6号清須線、名古屋高速16号一宮線、国道22号・302号などの道路網により周辺都市との連携が図られています。

清須市の総面積は1,732haで、東西約5.5km、南北約8.0kmの広がりを持ち、愛知県の面積の0.34%に当たります。地目別では、宅地(45.5%)が最も多く、次に道路(18.4%)、農用地(17.1%)、水面・河川・水路(6.2%)、その他(12.8%)となっています。

### ■ 清須市の位置



時点:平成24年1月4日

### ■ 清須市の交通網



### ■ 清須市の地目別土地利用面積

単位: ha

	総面積	宅地			農用地			森林原野	道路	水面・河川・水路	その他2)
		住宅地	その他1)	田	畑	採草放牧地					
清須市	1,732	446	343	139	157	—	—	318	108	221	
構成比	100.0	25.7	19.8	8.0	9.1	—	—	18.4	6.2	12.8	

※注:その他1)は「宅地」から「住宅地」を除いた工業用地などである。その他2)は総面積から「宅地」、「農用地」、「森林・原野」、「道路」及び「水面・河川・水路」の各面積を差し引いたものである。  
資料:県地域振興部土地水資源課「土地に関する統計年報」平成22年



## 2 歴史・沿革

### ① 近代以前

清須市の区域の歴史はるか遠く、尾張平野最大の遺跡である朝日遺跡に集落が開かれた弥生時代までさかのぼります。

市内には、室町時代のはじめ守護所下津城の別郭として築かれ、弘治元年（1555年）に戦国武将織田信長公が那古野城から入城した清洲城など、数多くの歴史資源が残っており、慶長年間には城下町一帯が「関東の巨鎮」と称され、文化の中心地として、また尾張の要所として栄えた歴史をもっています。

また、名古屋と中山道をつぶ最も重要な道路であった美濃路は、関ヶ原の合戦で勝利を収めた徳川家康公が通った吉例街道とされ、江戸時代には、数多くの大名たちが縁起を担いで通り、家康公の命により開設された青物市場とあわせ、宿場町として大いに栄えました。

江戸時代初期より宮重大根の栽培が始まり、尾張徳川家にも献上されており、江戸時代中期には全国に知れ渡るところとなりました。また、このころは、庄内川の氾濫により幾度となく水害にあっていた当地に、多くの農民や地元の役人たちの尊い汗と犠牲により、天明7年（1787年）に新川が竣工されました。その他、江戸時代に製作され、200年以上の歴史を誇る山車が練り歩く尾張西枇杷島まつりは、郷土の伝統文化として現代に継承されています。

### ② 近代以後

近代に入ると、明治13年（1880年）に春日井郡が東西の二郡に分かれて西春日井郡が誕生した後、西春日井郡の町村で合併が繰り返されてきました。

西枇杷島町は、明治22年（1889年）、下小田井村、小場塚新田村の合併により誕生しています。清洲町は、明治39年（1906年）、朝田村、一場村及び清洲町が合併して清洲町となった後、昭和18年（1943年）までに大里村や甚目寺町の一部と合併しています。また、新川町は、明治22年（1889年）、土器野新田村、上河原村、中河原村及び下河原村が合併して新川村となった後、明治23年（1890年）に町制を施行し、さらに明治39年（1906年）、桃栄町、寺野村及び阿原村と合併しています。春日町は、明治22年（1889年）下之郷村、落合村が合併し、春日村が誕生し、平成2年（1990年）町制が施行されました。

そして、平成17年7月7日（2005年）に西枇杷島町、清洲町及び新川町が合併して清須市が誕生。平成21年（2009年）10月1日、清須市と春日町が合併し、現在に至っています。



尾張名所図会にある下小田井の市